

意味論の現状と展望

白井賢一郎

1. 今回の発表では、次の点を中心にして、意味論研究の現状と展望についてまとめてみた。
(1)意味論研究の現状と展望を考えれば、なぜ、「形式意味論」なのか。(2)形式意味論の成立の経緯 (3)形式意味論の最近（概ね、1980年以降）の展開と今後の可能性

「形式意味論」(Formal Semantics)という用語は目新しいものであるが、ここでは、明示的な意味論を備えた文法の形式的枠組を指すと考えることにする。ただし、ここでいう意味論とは、いわゆる、「語用論」をも（可能な限り）包摂するものである。

伝統的な生成文法の枠組では、「SYNTAX」が文法体系の中で中心的な特別の位置を与えられ、「SEMANTICS」は、それと（解釈規則により）派生関係で結び付けられているにすぎない。しかし、我々にとって意味論とは、発話としての言語形式と意味との対応づけという一般的な問題自体にかかわっており、このような文法の構図はもはや容認されない。

2. この形式意味論研究は、直接的には、モンタギューの業績に源を発している。しかし、形式意味論の発展状況を見ると、たとえ便宜的にせよ、それを指すのに引続きこの故人の名を使うのは、もはや、適当ではなくなっている。

今日の観点から考えると、モンタギュー流の意味論の最も重要な特質は、自然言語に対してモデル論的意味論の考えを明確な形で導入したことである。この基本的考えに基づけば、自然言語の意味論研究は、言語表現と世界の中の対象との関係を組織立った仕方で規定することになり、それは数学上のモデル論の方策に依拠して実行される。このように、モンタギュー意味論は、モデル論的意味論の1つとして包摂される点に注意することが重要である。

3. 概ね、1980年代になると、形式意味論研究にいくつかの新しい動きが明確な形で現れ始めた。その1つは、「一般量化子理論」(Generalized Quantifier Theory)であり、この理論的展開は、自然言語にみられる「普遍性」の問題に対して意味論的観点からアプローチすることの重要性を示している。

他の2つの重要な展開は、「意味」に対する見方に関するモンタギュー流の意味論の基本的問題点に関連している。それらの問題は、次のように整理される。(1)動的な意味解釈の問題（コンテキストにかかわる要因の取り扱い）(2)「部分性」(partiality)の問題

(1)は、直接的には、「指標理論」に基づくモンタギューの指示詞の定式化の欠陥に対応

する。しかし、問題は、単に指示詞に限らず、一般的には、コンテキストや話し手の意図などのいわゆる語用論的要因をいかにして形式意味論の内に“積極的”に取り込んでいくかということにある。この課題に対する重要な手がかりとしては、代名詞の用法や照応の問題がある。この点に関しては、「ディスコース表示理論」(Discourse Representation Theory)等の最近の新しい枠組に基づく多くの注目すべき研究がある。

(2)の問題は、「可能世界」という(形式的)装置に依拠しているモンタギュー意味論の基本的難点であり、単に、命題態度の形式的取り扱いの問題に限定されるのではなく、新しい形式意味論の可能性を切り開く上で極めて重大である。意味の研究は、我々の「心」の問題を形式的に分析する“窓口”であり、最近の形式意味論研究は、AI研究者や自然言語の機械処理に従事する研究者との密接な交流を通じて、認知的問題を関心の中心においている。この問題を自然言語の意味論の観点から形式的にアプローチする出発点となるのは、言葉の中心的働きが情報(information)を伝えることにあるという点である。

モデル論的意味論を自然言語に適用する際には、言語表現に対応づけられる意味的对象は、世界の構成に関する従来の数学的对象というよりは、それについての我々の知識に関する情報論的对象(information-theoretic object)である。そして、情報は、本質的に“partial”な対象である。我々は、限定された言語行為の場においてさえも、世界の構成の有様に対して“全体的”な知識を持ちえない。このように、今日の形式意味論が情報の形式的理論へと展開していく中で、「部分性」の問題は意味論の基本的問題となっており、形式意味論の新しい枠組の1つである「データ意味論」(Data Semantics)や現在の形式意味論の中で中心的役割を担っていると考えられる「状況意味論」(Situation Semantics)において、この問題は中核的な位置づけを与えられている。

4. 以上の形式意味論の共通の同時的展開の射程は、意味論を構築する基礎的な数学的道具立てに関する“深淵”な問題にまで及んでくる。我々は、従来、モデル論的意味論を形式的道具として用い、世界(リアリティ)の構成を数学の集合論の手法により規定してきた。しかし、我々の意味的对象はもはや認知的対象である。モデル論的意味論を自然言語に適用する際には、改めて、数学上のモデル論自体に内在する“人工物”を排除しなければならない。問題の中核は、結局のところ、従来の「集合論」自体にあると予想される。この“ロマン”に満ちた問題に対しては、現在、「状況理論」(Situation Theory)の名のもとに研究が進行中である。(自然言語の)意味論に対する“論理的”／“心理的”アプローチという二分法は、もはや、意味を失いつつある。(しらいけんいちろう、中京大学)